

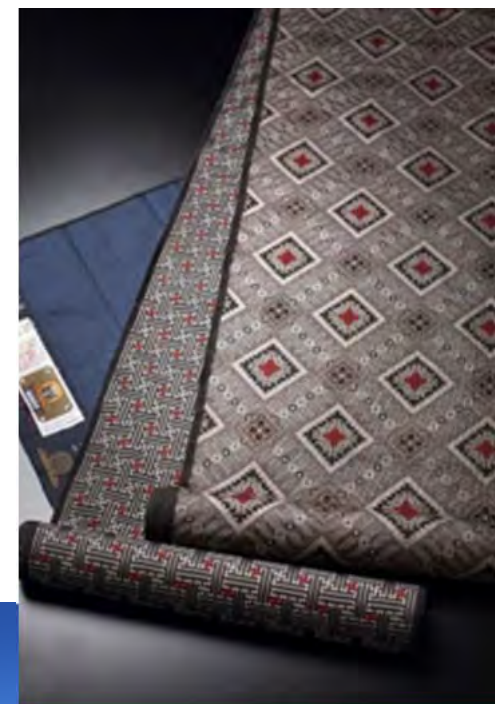
中小企業地域資源
活用促進法に基づく



ふるさと名物
Furusato Meibutsu

「道の島」の歴史と亜熱帯の 自然が育んだ“黒”の宝

わが市町村の
ふるさと名物は
これ!



鹿児島県 奄美市・龍郷町
が応援するふるさと名物

- ◎ 本場奄美大島紬の商品群
- ◎ 奄美黒糖焼酎の商品群



ふるさと名物
Furusato Meibutsu

応援宣言

鹿児島県 奄美市・龍郷町

地域の プロフィール



海の彼方(ネリヤ)に五穀豊穡を
祈願する「平瀬マンカイ」(国指定
重要無形民俗文化財)

奄美大島は、面積712km²と全国離島でも沖縄本島・佐渡ヶ島に次ぐ大きな島です。その北部を占める奄美市と龍郷町は、全国的にも珍しい飛び地をなしており、奄美群島の中心地として一体的に発展しています。

奄美大島は、鹿児島県本土と沖縄本島のほぼ中間に位置しており、亜熱帯海洋性気候に属しています。年間平均気温が21℃を超え、年間降水量は2,800mmを超えるなど、温暖で降水量が多い気候が特徴です。海岸線には美しい珊瑚礁の海が広がる一方、山岳部には希少動植物が多種多様に生息しており、平成25年には「奄美・琉球」として世界自然遺産登録国内候補地に選定されています。

歴史的には、七世紀の『日本書紀』に「海見嶋」として初出以降、中世期には、遣唐使の南方交易路における要所「道の島」として知られ、様々な文化を受容してきました。

各時代に琉球・薩摩・米軍の統治下に置かれてきましたが、島唄や八月踊りなど特色ある芸能を継承し、豊かな自然と独自の文化を誇る地域として発展しています。

- ◆ 「道の島」の歴史と亜熱帯の自然が育んだ “黒” の宝
 - ・ 本場奄美大島紬の商品群
 - ・ 奄美黒糖焼酎の商品群



アマミノクロウサギ

南洋から北上する黒潮は、世界最大規模の暖流であり、日本列島に湿潤温暖な気候をもたらします。また、大陸や南方から、技術・産物など様々な恵み（宝）を運んできました。

国指定特別天然記念物に指定される「生きた化石」アマミノクロウサギが棲息し、養殖クロマグロ日本一の産地でもある奄美大島の“黒”の宝の代表格が、その高貴な光沢から「黒いダイヤ」とも評される「本場奄美大島紬」であり、黒糖を原料とする「奄美黒糖焼酎」と言えます。

奄美市と龍郷町は、“黒”というキーワードで結ばれた奄美の二大名物「本場奄美大島紬」と「奄美黒糖焼酎」の商品群を応援します。



海の民の伝統を伝える舟こぎ競争



大島紬の小物類



様々な黒糖焼酎の銘柄



黒糖焼酎と大島紬での宴席

1

主な地域資源



泥染め



機織り

◆ 本場奄美大島紬

本場奄美大島紬は、一説には、遠くインドの「イカット」を起源とし、東南アジアを経て琉球から伝わったとされます。奄美に伝わった後、絣織の技術は世界最高水準まで高められ、ソテツやハブなど地元の自然をモチーフとした柄を数多く生み出すなど、高度に発展を遂げました。

特に、自生する車輪梅(方言名:テーチギ)の煮汁に染めた後、泥田の泥で染め上げる「泥染め」は、世界でも唯一無二の染色法です。奄美の土壌の特性である、絹糸を傷つけない細かい粒子と豊富な鉄分が車輪梅のタンニン酸と化学反応し、独特の格調高い「黒」が生み出されます。

「大島紬は二度織る」と言われます。織り上がった布地に柄を描くのではなく、絣糸の染めない部分を締機により綿糸で強く締め、染を施した後、綿糸をほどこいて柄に合わせて色を入れていきます。この糸を織機にかけ、織工が絣模様を微調整しながら織ることで、図案通りの反物に仕上がります。

全ての工程は手作業で行われるため、完成まで半年から一年かかります。奄美の自然と島人(シマツチュ)の繊細な技術を結晶した「本場奄美大島紬」は、こうして世界に誇る伝統工芸品として完成します。

「国内三大紬」とも「世界三大織物」とも称される本場奄美大島紬ですが、全国的な和装需要の低迷により、生産量は全盛時の2%以下まで落ち込んでいます。技術を後世に継承するためにも、伝統を守りつつ、新たな商品開発と販路拡大が必要です。

2 主な地域資源

◆ 奄美黒糖焼酎

奄美黒糖焼酎は、米麴に黒糖を加えて発酵・蒸留する本格焼酎として分類されています。これは、戦後の米軍統治下に米が不足したことから、代用品として黒糖を使用した製法を、昭和28年の日本復帰時、酒税法の特例措置として奄美群島限定で認められたものです。

世界の蒸留酒は古代ギリシャのアリストテレスが祖と言われ、その製法は交易路を経て世界に伝播しました。西欧でブランデー・ウイスキー・ウォッカ、中近東でアラック、中国で焼酒、タイではラオロン、琉球では泡盛を生み、奄美にも伝来しました。

一方、サトウキビの我が国への伝来は、唐の高僧「鑑真」が伝えたとも、遣唐使によるものとも言われます。唐との交易路として重要な役割を果たした「道の島」の歴史的・地理的条件によって、奄美群島において蒸留酒とサトウキビが出会い、奄美黒糖焼酎が誕生したと言えます。

奄美黒糖焼酎は、サトウキビ由来の甘く優しい香りと、米麴が持つ芳醇な風味が広がり、奄美の豊かな自然と情熱を感じさせる銘酒として全国に多くのファンがいます。お酒は、昔から「百薬の長」とも言われますが、奄美黒糖焼酎は、蒸留酒ということで、黒糖を原料としながら糖分ゼロ、動脈硬化予防にも効果が高い、大変ヘルシーなお酒です。

奄美黒糖焼酎の生産量は、平成15年頃の本格焼酎ブーム時に増加したものの、他の酒類の巻き返しなどもあり、ブーム以前の水準で推移しています。



サトウキビの収穫



仕込み風景

奄美市と龍郷町の取り組み ①

1

大島紬振興策



大島紬大行進



紬議会

- 1月5日は「紬の日」 毎月15日は「すきすき紬デー」

奄美市は、旧名瀬市時代の昭和46年に「伝統産業振興モデル都市」を宣言。基幹産業である大島紬の振興によって、明るく豊かな街づくりを推進すると宣言しました。

昭和53年には、毎年1月5日を「紬の日」と決めました。同日開催される成人式での紬着用を呼びかけ、参加者全員が紬姿で市街地を練り歩く「大島紬大行進」を実施するなど、産地における紬愛用の気運醸成を図っています。

龍郷町は、「龍郷柄」「秋名バラ」「西郷柄」といった代表的な古典柄を生んだ「大島紬の故郷」とも言われる町で、奄美市と並ぶ大島紬生産の中心地です。

産地組合と奄美市及び龍郷町は「本場奄美大島紬産地再生協議会」を組織して、様々な大島紬振興策に取り組んでいます。毎月15日を「すきすき紬デー」と定め、大島紬ミニ講座、大島紬アカデミー(小物作り教室)、着付け体験など様々なイベントを実施しています。

奄美市及び龍郷町議会においては、年末の最終本会議を「紬議会」として、議員・当局の全員が大島紬を着用して出席します。

2

黒糖焼酎振興策

○ 5月9日・10日は「奄美黒糖焼酎の日」

平成19年5月奄美大島酒造協同組合は、「5・9・10(こ・く・とう)」の語呂を合わせて、毎年5月9日と10日を「奄美黒糖焼酎の日」と制定して全国に発信すると宣言しました。それ以降、毎年この両日には、社交飲食業組合らと連携して様々なイベントや啓発活動などを行っています。

その他、11月1日の全国的な「本格焼酎の日」、大型クルーズ船寄港時の試飲・販売など、あらゆる機会をとらえて各酒造メーカーが積極的に出展しており、地元の飲食店街でも黒糖焼酎を愛飲する気運が定着しています。

平成25年10月には奄美市、同年12月には龍郷町において、黒糖焼酎乾杯推進条例を制定し、地元が一丸となって黒糖焼酎による乾杯の習慣を広めることにより、黒糖焼酎の普及を通じた焼酎文化への理解促進を図っています。



黒糖焼酎イベントのポスター



黒糖焼酎で鏡割り



試飲・販売風景



黒糖焼酎で乾杯！

3

その他



地球印



奄美黒糖焼酎商標



Touch The Japan in Taiwan

○ 地域団体商標登録

【本場奄美大島紬協同組合・奄美大島酒造協同組合】

産地一体となって技術や品質の維持・向上を図り、地域ブランドとしてより適切に保護するため、平成18年11月に「本場奄美大島紬」、平成21年2月に「奄美黒糖焼酎」が地域団体商標として登録されました。

本場奄美大島紬は、商標登録「地球印」(昭和52年7月登録)を中心に、泥染証紙など各種証紙や商品履歴システムによって、他産地と差別化し国内和装産地を代表するブランドとして認知されています。

奄美黒糖焼酎は、奄美群島にのみ製造を許可された本格焼酎として、所有する地域団体商標の商標管理によって、更なるブランド力の向上を図っています。

○ 奄美の観光と物産展

奄美の特産品の販路拡大と観光客誘致を主な目的として、大消費地において奄美群島規模で物産展を展開しています。中でも、本場奄美大島紬と奄美黒糖焼酎は主力商品として売り出しています。

物産展に際しては、商品だけでなく奄美の文化・芸能を丸ごとお届けする「奄美の夕べ」を開催しています。奄美を象徴する佇まいとして、大島紬を身に着け、島唄を楽しみつつ黒糖焼酎を味わうイメージをお伝えしています。

同様のプロモーション活動は、国内大消費地だけでなく、ドイツ・台湾・アメリカなど海外においても展開しています。